

平成27年度 自己評価(結果)

学校番号	126	学校法人静岡理科大学 静岡北中学校	記載者	廣住雅人
------	-----	-------------------	-----	------

学校教育目標	将来のScienceとSocietyを牽引できる存在感と思慮深さを持った人材の育成	【総合評価】 総合的には、評価3ということで、各項目を個別にみていくと、すべての目標が達成されたわけではないものの、ほぼ設定目標は達成されたと判断できる。開校以来6年が経過し、第一期生も高校を卒業し、個々の生徒たちが自己の目標に見合った進路決定ができたことも、本校の評価を高めていく指標となると考える。学則定員を充足させる目標は達成できなかったが、今後も在校生のみならず、内進生として静岡北高等学校に進学した生徒たちが、確固たる成果を残してくれることで、本校の評価を高めることを期待したい。		
教育方針	将来、科学技術に夢と希望をもち、創造性豊かな人材育成の基礎をつくる			
今年度の重点目標		評価	成果と課題	次年度の取組
1 教育力強化策を推進する		3	中高一貫の6年の教育体制の学習システムやプログラムについて、修正、補強、改善を行った。SSZ活動に関しては、学年ごとのプログラムを実施し、社会的評価を受ける活動を行った。	教員のさらなるスキルアップの向上が求められ、時代に即応した教育スタイルを発信していくことが必要。
2 法人内連携教育の強化を図る		3	SSZ活動で静岡理科大学でのインセンティブレクチャーは効果的であり、静岡理科大学にて実施した研修によって意識が高まった。	中学と高校といった連携の事だけを考えるのではなく、専門学校や大学とのさらなる連携の在り方を考えていくことが求められる。
3 国際化教育の充実を図る		3	SKYSEF、サイエンスフェアによって生徒達の意欲が高まった。また、スカイプを用いた、オーストラリアとの交流や、訪日した台湾の中学生との交流で、国際化教育を深めた。	国際課教育を行うための機会を考えて設けると共に、そうした時に、自ら積極的に海外の生徒たちとの間でコミュニケーションを取ろうとする意識を、生徒に持たせることが必要。
4 目標生徒数を達成する		2	学校説明会などの参加者数は、前年を大幅に上回ったものの、学則定員である60人の入学者を獲得できず、51人の入学者となった	魅力ある学校づくりをしつつ、それを効果的にPRするためにも、従来行ってきた以外の施策を考えた広報活動を行うことで、将来静岡北高校の中心的な存在として活躍する人材を獲得する。
5 学校経営方針を実現するための教育活動の展開及び教育環境を構築する		3	SSZ活動などにおいては、研究助成金をとることができ、キャリア教育に関しても、先輩たちの活動を常に見ることができ、自己の将来をイメージすることができた。	電子黒板・デジタル教科書を有効活用する授業展開を幅広い教科での実践を行う。また、校内ネットワークを活用した、教育手法についても研究していく。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績	成果と課題	次年度の取組
学校経営	設定された教育目標にそい学校経営計画書が作成され、それに基づいた教育活動を展開する。	教育目標、学校経営計画書、教育活動	言語技術やCASEの授業において、本校にあった形のものプログラムとしてまとめ上げられたり展開されたりしているが、担当教員のスキルに頼るところにとどまっているので、中学教員間でノウハウを共有することで、より発展させていく。	SSH活動の中で、各教科において、開発してきた手法を活かす工夫がなされたり、担任主導のディベートを取り入れたりするなど、多くの教員関わった点は評価される。	3 言語技術やCASEの授業において、本校独自のまとめあげたプログラムに関して、特にCASEについては、第2学年における数学領域での統計処理の分野で、さらなる発展性を持たせたオリジナルテキストを開発することができた。	他校にはない本校における特異性を持った教育において、オリジナル性をさらに高めていく。また、SSZ活動においては、実践的な英語力を強めていくことを考えていく。
教育課程・学習指導	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、学習目標・計画・指導、課題実施、学習状況把握	高校との情報の共有化を図れる状況に改善はしてきているものの、まだ双方の状況を十分に相互理解するまでには至っていない。義務教育段階の中学と高校の違いはあっても、読歩と理解をする意識を持ち議論を進めていく体制を作る。	3 第3期生を高等学校に送り出すにあたり、高校側と会議体も一緒に運営するようにし、情報共有がしやすい環境にした。進路に関しては、3期生を個々の生徒にあった学科選択で送り出すことができた。	3 高校との情報の共有化を図れる会議体・組織体に改善はしてきているが、まだ十分な相互理解するまでには至っていない。中学の完成年度を迎え、物事のとりえ方に関する意識のギャップは、少しずつ解消されてはいるものの課題は残されている。	会議体の組織構成を考えつつ、双方の入れ調整を確実に進めるメンバーによるディスカッションの場を確実に儲けること。進路に関しては、静岡北高等学校の魅力や、在校生に深く浸透させていく手段を考えることが必要。

生徒指導	健全な高校生活をおくれるような生徒への啓発活動を行い、個々の生徒へのサポート体制を家庭との協力のもと確立し、生徒理解に努める。また自立した生徒の育成のための支援をする。	生徒への啓発活動、家庭との連携、事前・事後指導体制、人間教育、生徒理解、基本的な生活習慣の確立、自立した生徒の諸活動	目的をもって実施している会議体があるなら、そこの情報の共有化をすべく機能させることが必要。ルーチンで開催している会議体で有意義な情報交換がなされないのであれば、精査する。	中学内における生徒の状況把握については、ケースによっては、中学教職員で指導する理解ができており生徒の成長を見たが、いまだ各学年での個別対応によるものが多く、一丸となった指導体制はまだ確立されなかった。	3	運営委員会の前に実施される中学部会において、各学年の取り組み、個々の生徒の情報共有に関しては行うことができた。そして、運営委員会においては、中学が考える施策として、高校の先生方も交えて議論することができた。	個々の生徒の成長段階にあった学習指導や生活指導を、家庭とも連携を取りながら学年部で計画し、それを中学校全体で共有することで、学校全体で生徒を育てていくという体制の中での人間養育を実践する。
進路指導	学校の方針に基づいた進路指導を展開し、個々の生徒の進路希望を実行する。また、本校独自のキャリア教育を実施する。	学校の方針に基づく進路指導、生徒への情報提供、個々の生徒への対応、	高校との情報共有化に関しては、中学側と高校側でのギャップを解消する。中学校の実態に即した進路指導体制を進めていくのか、中学から進学する生徒を6年でどう育てるかを、さらに踏み込んで検討する。	昨年度までの反省に基づき、3年生の進路指導のスケジュールに関しては、予定通りの会議を組み、高校と情報交換しながら、3年部は個々の生徒に見合った学科選択をさせることができた。しかし、いまだ高校との意識差があった。	3	高校との情報共有化に関しては、中学側と高校側でのギャップの解消については改善された。中学校の実態に即した進路指導体制を進めていくのか、中学から進学する生徒を6年でどう育てるかを、さらに踏み込んで検討し、本校が求める生徒像を明確にした。	個々の生徒に対して、早期段階から将来の職業観を意識させるキャリア教育を充実させる。また、静岡北高等学校進学の際に、生徒の適性を十分に考慮したうえで、高校入後の学習体制が見極められるような進路指導をしていく。
安全管理	日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りを行うことが必要。また、学校として校内の危険個所の定期的な点検、スクールバスの安全運行といった意識を常に持ち合わせる。	防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行	学校独自の一斉配信のシステムも確実なものにしなければならぬが、法人として取り組んでいる安否情報確認システムもあまり機能していないので、この利用も視野に入れ、情報伝達が確実にできる方案を検討する。	保護者の協力のもとにメールアドレス登録を行い、中学独自で保護者に一斉配信のメールを送れる環境を整備しているが、本年度も100%保護者にメールが配信できる環境にならなかった。	3	学校独自の一斉配信のシステム及び法人が作成した安否情報確認システムに関する機能性の改善については、あまり見ることができなかった。機能がないので、本校独自の一斉配信システムについても、機能はさせたものの、その使用は一部にとどまった。	中学だけでなく、高等学校とも方針をすり合わせ、有事の際への連絡方法などに関して、システム構築を検討することが求められる。
保健管理	生徒の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療助言を確実に行う。また部活動の活性化を図る。	検診計画、健康管理指導、運動部・文化部の活性化	生徒の健康留意点に関しては、全教職員で共通理解をしている状況を持つ。また、部活動に関しては、今までの成果以上のものを常に求める意識を持ち活動していく。	生徒の健康管理については、養護教諭と担任との情報共有はできていたものの、教科担当で若干みられない。空手道部は男女とも全国大会出場し、女子団体は準優勝した。バドミントン部も県大会出場した。	3	生徒の健康等の留意点に関しては、全教職員で共通理解をするよう情報の共有化に極力務め、図ることができた。また、部活動に関しては、全国大会に出場したり、市内ではあるが強化指定選手に選ばれられる生徒も出てきた。	生徒の健康管理に関する情報・対応についての教職員間での情報共有体制を維持する。また、突発的なことに関する報告体制をしっかりとさせる。部活動に関しては、生徒たちが部活動に集中して取り組めるようなバックアップをする。
組織運営	組織的な校務分掌体制を整え、規律をもって教職員が職務を全うする。また計画的な予算編成を中長期的な観点から考え、日々の経理業務を正しく管理する。加えて個人情報に関する管理、公文書管理を適切に行なう。さらに保護者・地域と連携した活動を展開する。	効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の編成及び実行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立と効果的な活用	会議体は必要なものだけに精査し、どの会議がどういった性格のものであるかを教職員が共通理解し、それぞれ会議に全員で臨む。	高校と運営委員会・職員会議を合同で行うように会議形態を変化させ、中学での案件は、中学部会で検討したうえで、運営会議に諮っていくといったスタイルに変えていくことで、高校教員との情報共有を、しやすい会議形態に移行したが、中学の意見が反映されていないといった意見も残っている。	3	会議体は必要なものだけに精査し、どの会議がどういった性格のものであるかを教職員が共通理解し、それぞれの会議に全員で臨むことができた。	高校と連携し、今後の中期的な視野の中で、学校返還をどのように推し進めていくかのビジョンを持つていくことを検討する。
研修	学校の教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるので、計画的かつ時代が求める教師となっていくための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしていく。	計画的な研修体制の確立、郊外研修への参加、研修報告会の実施	学習成果に対する外部からの客観的な評価を聞く機会を各課と共に、外部研修に出かけるように、時間と人的な問題をクリアしながら進めていく。	学習に関する取り組みに関する分析・検討を定期的に行いながら、生徒の学力向上のために、自分たちが次に何を目標としていくべきかを、常につかんでいる状態を作っていくことはかかってきた。しかし、日常業務の多忙さとスタッフの数が少ないこともあり、外部研修に出る研鑽をつむ機会が持てなかった。	3	入試広報における学校見学・説明会などにおける学習成果に対する外部からの高い評価を得ることはできた。外部研修への参加についても、極力時間と人的な問題をクリアしながら進めたが、人的な制約から著しく参加数を伸ばすまでには至らなかった。	中学校設置の際の原点に戻り、改めて本校におけるICT教育の在り方がどうあるべきかを、実践を行いつつ検討する。また、WiFi対応の校内ネットワーク環境が整っていく中で、どのような教育手法が考えられるのかを考えていく。
保護者、地域住民との連携	学校を支えてくれる保護者の会や外部団体との連携を強化し、学校運営を側面から支援してくれる組織の意見を受け入れながら、更なる本校の発展を目指す。	保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼	大人社会だけを対象とした地域からの評価だけでなく、地元の小学校との交流活動などを通じて、本校の存在を地域において強く出せるような努力をしている。	SSH活動を通して、行政や地域とのコラボレーションをする機会を多く持つことができた。その結果、徐々にではあるが地域に根差した学校となる基盤はできた。	3	県・市とコラボレーションした環境保全に関するボランティア及び研究活動には積極的に参加することで、地域との関係を密接にし、社会的な評価を高めた。しかし、小学生の交流については、内部での広報活動にとどまった。	得意技能を持った方を講師として招き、キャリア教育的な側面や心の教育の側面から、生徒を育てていくことを試みる。
施設設備	施設設備の美化と定期的な点検を確実に実行し安全管理に努め、生徒たちにとっての学習環境を整備する。	効果的な施設利用と環境美化、施設・設備の点検、学習環境の整備、図書館の活用	今後の教育活動の中で、本校がスタートした時点で持っていたICT教育のさらなる発展形態を、ICT教育の現状と将来展望をかんがみながら、本校としての提案と環境整備をしていく。	日常生活における読書のための図書館利用、プレゼンテーション能力向上のためのパソコン教室利用、SSH活動における理科室の活用等、各々な学校施設を、各各学年活動において有効に活用できた。また、懸案であった1年生の教室配置を変更できた。	3	本校がスタートした時点で持っていたICT教育のさらなる発展形態を、積極的に実践を行った。各教室の環境を整備に関しても、有線ではあるが、教室内でネットワークが利用できる環境は整備できた。	高校と一緒に、校内ネットワーク環境を整備されるので、これを生かした教育活動の展開に関して検討する。
総合評価					3		